



筑紫女学園大学リポジト

ネルヴァルとカミーユ・ロジエの絵画

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間瀬, 玲子, MASE, Reiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/48

ネルヴァルとカミーユ・ロジエの絵画

間 瀬 玲 子

Nerval et les peintures de Camille Rogier

Reiko MASE

I. 序

19世紀の作家ジェラルド・ド・ネルヴァルGérard de Nerval には画家カミーユ・ロジエCamille Rogier という友人がいた。ネルヴァルの生涯の中で随所に登場する大事な人物である。しかしフランス絵画史ではロジエはほとんど忘れられた存在である。

本論文ではロジエの絵画がネルヴァルの作品執筆活動とどのような関係があるのかを論じたいと考える。

II. カミーユ・ロジエについて

序でも書いたようにロジエは19世紀においても著名な画家とは言えなかった。例えばアンリ・ベラルディ Henri Béraudi の『19世紀の版画家』*Les Graveurs du XIX^e siècle* (全12巻、1885年～1892年刊行)のRogier (Camille) の項目 (12巻中の11巻、1891年刊行) を見てみよう。ロジエに関する記述は1ページの3分の2にも満たない。なおベラルディは1874年に設立された書物の友協会の2代目会長であり、愛書家として有名な人物であった。(1)

Rogier (Camille), peintre, graveur et lithographe.

Vignettes romantiques et lithographies. (...)

Quelques lithographies pour *Le Monde dramatique* (...). (2)

ロジエ (カミーユ)、画家、版画家、石版画家。

ロマンチックな挿絵と石版画 (中略)。

『演劇界』のための数枚の石版画 (略)。

ベラルディはロジエの職業と主要作品を列挙するに留めている。またその記述の仕方もかなり大雑把である。後に詳述するが『演劇界』*Le Monde dramatique* はネルヴァルが私財を投げ打って発行した雑誌の名前である。ベラルディがネルヴァルの別の友人である画家セレスタン・ナントゥイ

ユ Célestin Nanteuil に割いたページの多さと比較すると、ロジエの評価がいかに低いかがよく理解できる。(3)

時を多少遡るがフィリップ・ビュルティ Philippe Burty が1887年に刊行した『ロマンチズムの時代 カミーユ・ロジエ』*L'Âge du romantisme, Camille Rogier* はページ数は少ないが、カミーユ・ロジエの人生を簡潔に紹介している。また随所にロジエのエッチング、挿絵、石版画などが収録されている。後に詳述するが「ラ・シダリーズ」*La Cydalise* と題した版画は美しい彩色画である。ビュルティの記述の中でネルヴァルの書簡や作品では見当たらない記述は以下のとおりである。

Après 1848, Étienne Arago l'avait fait entrer dans les Postes, et lui avait donné Beyrouth. (Beyrouthの綴りは原文どおり) (4)

1848年以降、エチエンヌ・アラゴは彼（ロジエ）を郵便局に入局させ、彼（ロジエ）にバイルートを与えた。

エチエンヌ・アラゴ（1802年～1892年）は作家で政治家である。『ロマンチズムの時代』は12ページと決まっているので、ビュルティの文章は過度に簡潔である。これ以上のことは書かれていない。アラゴがロジエの後半生を左右するきっかけを作ったことは確かである。

ここでロジエに関して、ネルヴァルの書簡や作品及び研究書の記述を参考にして簡略にまとめてみよう。彼は1810年に生まれ、1896年に亡くなった。ネルヴァルとは1830年代のドワイエネのボヘミアン生活の仲間であった。その後イタリアに出発した。1840年代にトルコに渡り、コンスタンチノーブルでネルヴァルと再会している。1843年にフランスに帰国。1846年に画文集『トルコ』*La Turquie*を出版した。1848年以降はレバノンのバイルートでフランス郵便局長を務めた。

繰り返しになるがロジエに関する研究書は数少ない。事典類のごくわずかな記述とネルヴァルが残した文学作品と書簡によってロジエの人生を再構成するしかない。また新しい資料はほとんど出てこないの、不明な点は多いと言える。ロジエが中近東で描いたとされる絵画を見ることすら現時点では困難である。(5)

Ⅲ. ドワイエネ時代

ネルヴァルは『ボヘミアの小さな城』（1853）*Petits Châteaux de Bohême* 「第1の城」のI「ドワイエネ通り」*La rue du Doyenné* の中でパリのドワイエネ街での共同生活を次のように書いている。

Le bon Rogier souriait dans sa barbe, du haut d'une échelle, où il peignait sur un des trois dessus de glace un Neptune — qui lui ressemblait ! (6)

人が良いロジエは梯子の上から髭の中で微笑んでいた。彼は3枚の鏡の上部の一つにネプチューンを描いていた。それは彼（ロジエ）に似ていた！

1834年から1835年頃テオフィル・ゴーチエ Théophile Gautier がドワイエネ通りに住んでいた。ネルヴァルはアルセーヌ・ウーサー Arsène Houssaye、ロジエと共にドワイエネ袋小路3番（3 impasse du Doyenné）に住んでいた。住居を借りていたのはロジエであった。そしてネルヴァルは『ボヘミヤの小さな城』に次のように述べている。

... les deux trumeaux de Rogier, où la Cydalise, en costume Régence, en robe de taffetas feuille morte, — triste présage, — sourit, de ses yeux chinois, en respirant une rose, en face du portrait en pied de Théophile, vêtu à l'espagnole. (7)

（前略）ロジエの二つの窓間壁、そこにシダリーズが摂政時代風（オルレアン公フィリップの摂政時代、1715-1723）の衣装をまとい、枯葉色のタフタ織のドレス—悲しい予兆だが—中国風の目で笑い、バラの花をかぎつつ、真向いにはスペイン風の衣装を着たテオフィルの全身の肖像がある。

プレイヤッド版の編者による注によるとロジエによって描かれたこの肖像の存在はわからない。(8) ここではシダリーズと呼ばれた女性がロジエの恋人であることを指摘することに留めたいと考える。(9)

彼女を描いたとされる絵が上記のビュルティの著書に掲載されている。幸いにもこの著書の現物入手した。その図版はあまり大きくはない。穏やかな顔をしており、鼻筋はとおり、目は適度な大きさである。額は比較的広く、頭には薄い赤色の髪飾りがのっている。髪の毛は左右が巻き毛である。衣装はふわっと広がっており、首から黒っぽい布が二本下がっている。石版画の左下には出版社名、右下に印刷所名が記載されている。手には扇子状の物を持っている。『ボヘミヤの小さな城』の記述とは一致はしないが、この絵を見ると、シダリーズと呼ばれた女性の姿を想像することができる。(10)

IV. 『演劇界』の挿絵

ネルヴァルは私財を投じて演劇専門誌『演劇界』*Le Monde dramatique* という雑誌を共同出資という形で出版した。創刊は1835年5月9日である。フランス国立図書館電子テキストサイト Gallicaで電子テキストの形で公開されるようになった。経営に行き詰まり、ネルヴァルが関わったのは約1年だと言われている。ネルヴァルの手を離れた後も1841年9月16日号まで続いた。念のために1835年第1巻、1835年第2巻、1836年3巻までを対象にして調査した。なおネルヴァルがどの記事を執筆したのかは全く不明である。(11) ロジエが描いた絵が1835年第1巻に掲載されている。

その内の2枚の絵を考察してみよう。

1. *Traite des Noirs*

『演劇界』1835年第1巻にシルク・オランピック劇場 Théâtre du Cirque- Olympique で演じられたシャルル・デノワイエ Charles Desnoyers とジュール＝エドゥアール・アルボワズ・デュ・ピュジョル Jules-Édouard Alboize du Pujol (アルボワズと略す場合がある) の *La Traite des Noirs* を主題としたロジエの絵が掲載されている。この演劇作品には定訳がない。『演劇界』の表紙から数ページ後の簡略な目次の「パリの演劇」という項目において最初に本作品が紹介されている。また目次の「版画」の項目でもカミーユ・ロジエの作であることが明記されている。版画の項目に記載された版画家はロジエ、セレストン・ナントゥイユ Célestin Nanteuil、ルイ・ブーランジェ Louis Boulanger、アンリ・モニエ Henri Monnier の4人である。なお巻末には詳細な目次が掲載されている。奴隷制度廃止と関わりつつ、大掛かりな舞台装置のあるスペクタクルの色合いが強い本作品は同劇場で1835年4月24日に初めて演じられた。『演劇界』の同号には同演劇に関する無署名の記事が記載されている。その一部を引用してみよう。

Au cinquième acte, nous sommes en pleine mer. Un vaisseau blanc attaque un vaisseau noir. Les pirates nègres coulent à fond les marins blancs. Le tout a beaucoup réussi. (12)

5幕では海上にいる。白い船が黒い船を攻撃する。黒人の海賊は白人の船乗りを残らず沈める。全てはうまく成功した。

この無署名の記事を参考にしながら、ロジエの絵を分析してみよう。絵の中央に2艘の帆船が書かれている。帆には人が登っている。絵だけでははっきりはしないが、この2艘の船は戦いをしている。その下に Cirque olympique Traite des noirs 5^e acte という文字がある。ロジエの絵の特徴は周囲を縁飾りで飾ることである。絵の上部には動物二頭、その各々を右と左にいる二人の裸体の女性が支えている。その下には左右で蛇がとぐろを巻いている。植物の蔦も絡まっている。下部には二頭の動物が描かれている。それを裸体の子供が頭をなでている。(13) 演劇の内容と絵柄との間には多少差異がある。中央部の船は演劇の内容を示しているが、縁にいる女性、子供、動物などはあまり関係がない。

幸いにもアメリカの研究者バーバラ・クーパー氏 Barbara Cooperが本作品の校訂版を出版している。クーパー氏は『演劇界』の上記の記事を引用しつつ、次のような分析を行っている。多少長くなるが引用してみよう。

On se demande si le chroniqueur a bien réellement assisté à la pièce et si oui, s'il y a vu autre chose qu'un grand spectacle nautique auquel des conflits entre Noirs et Blancs servaient

de prétexte. La lithographie qui accompagne l'article, faite par Camille Rogier, est beaucoup plus intéressante que ces remarques puisqu'elle nous fournit la seule image contemporaine de la mise en scène de la pièce, reproduisant — mais avec quelle fidélité ? — la scène du combat finale du drame, celui dont tous les critiques louaient la réalisation. (14)

記事担当記者が本当にその演劇を実際に観劇したのだろうかと思う。もしそうならば彼はそこに水の上の大スペクタクルとは別のものを見た。この演劇では白人と黒人の間の紛争が口実の役目を果たしていた。記事に添えられているカミーユ・ロジエによって制作された石版画はこれらの記述よりもずっと興味深い、というのはこの石版画は演劇の最後の戦闘の場面 — しかしどのような忠実さだろうか？ — を再現した、この演劇の演出の近代における唯一の絵を私たちに提供している。そしてこの演劇の批評すべてが演出を称賛していた。

クーパー氏は劇評そのものよりもロジエの石版画の重要性を指摘している。またクーパーは過去の研究書や研究論文を参考にしながら、この無著名の論文がネルヴァルによって書かれた可能性を示唆している。しかし判断材料が少ないので断定はできない。

ネルヴァルは自身の作品中でデノワイエ氏について言及している。たとえば『プレス』紙 *La Presse* 1840年8月10日号に「アンビギュ座 シャルル・デノワイエ氏によるモンバイまたはカラムニー」Théâtre de l'Ambigu 《Montbailly ou la Calomnie》, par M.Charles Desnoyer という劇評を掲載している。(15) ネルヴァルが執筆したデノワイエ氏の作品に関する評論は他には見つからない。またネルヴァルとアルボワーズ氏との関係のほうが深い。二人は『モンテネグロ人』*Les Monténégrins* という劇作品を共同で執筆し、リムナンデルが作曲を担当した。二月革命のせいで当初上演が予定されていたオペラ＝ナショナル座が閉鎖となり、上演が延期となった。結局1849年3月31日にオペラ＝コミック座で上演された。(16) この上演はまずまずの成功であったと言われている。

2. Eugénie Sauvage

次に1835年第1巻に収録されたロジエによる女優ウジェニー・ソヴァージュ M^{LLE} Eugénie Sauvageの絵を分析してみよう。『演劇界』同号にイニシャル入り(A.K)によるジムナーズ・ドラマチック座 Gymnase dramatique に関する二つの記事「ソヴァージュ嬢のデビュー」《Début de mademoiselle Eugénie Sauvage》と「スクリーブとドゥラフォレによる藁ぶきの家とその心(つましいながらも楽しい世帯)」《Une chaumière et son cœur par MM.Scribe et Delaforêt》が掲載されている。この二つの記事は連続しており、両方にソヴァージュが言及されている。記事に書かれたソヴァージュに関する評論の一部を見てみよう。

Mademoiselle Sauvage est petite et un peu grêle ; sa voix, dès les premiers sons, n'a peut-

être pas toute la plénitude désirable ; mais elle est douée d'une remarquable expression de physionomie ... (17) (grèle は grêle のことだと考えられる)

ソヴァージュ嬢は小さく、少し細長い。彼女の声は最初の音から多分望むべき完全さではない。しかし彼女は素晴らしい表情の表現に恵まれている。

この引用を参考にしながら、ロジエの絵を見てみよう。この絵もまた周囲を縁飾りで飾っている。中央には椅子に座ったソヴァージュが描かれている。多少前かがみであり、額が非常に広い。左右の髪の毛が巻き毛になっている。ウェストがきゅっと締まっている。袖が大きく広がっている。襟の幅も広い。名前の下にジムナーズ・ドラマチック劇場 Gymnase Dramatique と書かれている。すでに論じたラ・シダリーズと比較すると興味深い。ソヴァージュは正面ではなく、多少右を向いている。顔の雰囲気はラ・シダリーズとソヴァージュは多少似ている。しかしどんなに眞面目に見てもラ・シダリーズのほうが美しく描かれている。記事の本文はソヴァージュに対して非常に好意的である。しかしロジエの絵のほうはあまり好意的な描き方とは思えない。(18)

『演劇界』の該当する号には大判のロジエの絵は上記の2枚が掲載されている。この2枚から彼の画風を評価するのは難しい。しかし敢えて表現するのならば、穏やかな慎ましきだと考える。描かれた人物は概してうつむき加減である。見る者を突き刺すような視線はそこには存在しない。

V. 『トルコ — 19世紀オリエントの人々と習俗と習慣』

さて次に論じるのはロジエの画文集『トルコ — 19世紀オリエントの人々の習俗と習慣』*La Turquie, Mœurs et usages des orientaux* (1846年)である。この画文集にはテオフィル・ゴーチエの序文が掲載されている。よく知られているようにネルヴァルによって書かれた序文の下書きが残っている。(19)

この画文集の入手は困難であり、また電子テキストの存在を確認できなかったのでフランス国立図書館からコピーを取り寄せた。これほどロジエの絵を多数まとめて見ることができる作品はない。複製の状態があまりよくないのは残念である。(20)

多数の絵の中で印象深い絵が数枚ある。本文はページが記載されているが、図版のページにはページ数が記載されていない。収録されている作品はいずれも魅力的である。『トルコ』に描かれた人物は男女、年齢を問わず、眉毛、瞼、目がほかの部分に比べるととてもくっきりと書かれている。一番印象深いのはハーレムの3人の女性を描いている絵である。女性たちはターバンで頭を隠しているが、長い髪の毛ははっきりと見てとれる。女性たちの目と瞼の描き方にロジエ独特の雰囲気がある。真ん中の女性の目には力があり、こちらを見ている。すでに論じた「ラ・シダリーズ」とハーレムの女性を比較すると目と鼻筋に共通点がある。

また最後のページに厩舎内の3頭の馬が描かれた絵が収録されている。3頭の馬は繋がれてはいるが、それぞれ思い思いの方向を向き、生き生きとした動きを見せている。2人の厩舎の係員は付

け足しの様相を呈している。

ロジエの描く馬は人間よりも生き生きとしている。過去に執筆した論文においてビュルガー Bürger 作、ネルヴァル訳、モンプー Monpou 音楽の『レノーレ』の挿絵をロジエとナントゥイユが担当して1833年に刊行された挿絵付楽譜について論じたことがある。⁽²¹⁾ その論文においてロジエとナントゥイユの挿絵を比較検討し、ロジエの挿絵の軍配が上がると指摘した。この挿絵付楽譜は入手困難であり、電子テキストの存在を確認できなかったため、フランス国立図書館からコピーを取り寄せた。絵のページのコピーの状態が悪いのは残念である。⁽²²⁾ このコピーよりも『アルバム ジェラルール・ド・ネルヴァル』 *Album Gérard de Nerval* に掲載された絵のほうが明瞭である。レノーレと亡霊となった恋人が乗っている馬は今にも死にそうな様子をしている。⁽²³⁾ ロジエは馬を描く才能があったと考えられる。

VI. 東方の宿

すでに言及したフィリップ・ビュルティ 『ロマンチズムの時代』の「ジェラルール・ド・ネルヴァル」 *Gérard de Nerval* の号（1887年）にロジエが描いたイルディス=ハンの宿の絵が収録されている。⁽²⁴⁾ これは次のネルヴァルの手紙に書かれている宿だと研究者たちは考えている。1843年10月5日付トルコのコンスタンチノーブルから父親に宛てた手紙の一部を引用してみよう。

... j'ai trouvé un logement très agréable, avec la plus belle vue , dans un Khan Ghildiz-Khan — c'est-à-dire hôtel de l'Étoile... ⁽²⁵⁾

私はイルディス=ハン、つまり星の宿にとっても眺めのよいとても快適な部屋を見つけました。

ネルヴァルはヨーロッパ人の町ベラを離れ、金角湾と海の間にあるコンスタンチノーブルに居を定めた。この経験は『東方紀行』「ラマダンの夜」の「II 劇場と祭」にいかされている。イルディス=ハン（星の宿）は隊商宿（caravansérail）である。

Nous nous rendimes à Ildiz-Khan, situé dans la plus hautes partie de la ville, près de la *Colonne brûlée*, l'un des restes les plus curieux de l'ancienne Byzance. Le caravansérail, entièrement bâti en pierre, présentait au-dedans l'aspect d'une caserne. Trois étages de galeries occupaient quatre côtés de la cour, et les logements, voûtés en cintre, avaient tous la même disposition... ⁽²⁶⁾

私たちは町の最も高い部分に位置するイルディス=ハンに行った。古代ビザンチウムの最も奇妙な遺跡のひとつ、焼けた円柱の近くだった。隊商宿は全体が石造りで、中は洞窟の様相を呈していた。3階建の回廊は中庭の四面を取り囲んでいた。アーチ型の天井がある部屋は同じ間取り

をしている…

ネルヴァルの上記の描写とロジエの絵を比較してみよう。ロジエの描いたイルディス＝ハンは3階建てではなく、2階建てである。窓は吹きさらしであり、数人の人は2階の窓から中庭を見ている。壁にはつたのような植物がはっている。中庭には現地の服装を身に着けた男性が多数いる。中には明らかに働いている人もいる。ネルヴァルが実際に宿泊し、『東方紀行』の中で描いたイルディス＝ハンを想像するのにこれ以上の絵はない。

VII. 終わりに

序でも書いたようにロジエは画家としては忘れられた存在である。新たな研究資料も出てこない。また関係資料も電子テキスト化されていない。

しかしネルヴァルのドワイエネ時代から東方旅行時代までの大事な場面をロジエの絵がどんな証言よりもはっきりと版画などの絵画芸術を通して私たちにを見せてくれる。ドワイエネ時代を彩る女性「ラ・シダリーズ」のほのかな色合いが魅力的な絵、ネルヴァルが創刊した『演劇界』を飾る数枚の絵、そしてネルヴァルの東方紀行の描写を証明する宿の絵、これらがネルヴァルの人生の重要な場面を私たちに想起させてくれる。またネルヴァルがその序文の下書きを書いたとされるロジエの画文集『トルコ』に収録された絵をネルヴァルはしっかりと見たことであろう。残念なのはロジエが東方時代に描いたであろう絵を見るができないことである。しかしパリのオルセー美術館には外交官で写真家のアンリ・ソヴェール Henry Sauvaire がロジエを撮影した写真が多数保存されている。これはネルヴァルの死後ではあるが、とても貴重な資料である。今後もこのような資料が発掘され、ロジエの人生はネルヴァルとどのように関わったのか、ロジエはネルヴァルの死後どのような人生を送ったのかを知ることができるようになることを望んで止まない。(27)

注

- (1) 気谷誠『愛書家のベル・エボック —アンリ・ベラルディとその時代—』図書出版社、1993年、pp.131-146にベラルディの『19世紀の版画家』（全12巻）について詳しく書かれている。気谷氏によると、ベラルディはこの著作のために版画家たちに版画制作を依頼し、この著作に実物の版画を添えた。気谷誠『西洋挿絵見聞録』アーツアンドクラフツ、2009年においても『19世紀の版画家』が言及されている。
- (2) Henri Bérardi, *Les Graveurs du XIX^e siècle*, tome XI, Paris, Librairie L. Conquet, 1891, pp.231-232 (Reprints from the collection of the University of Michigan Library, Lexington, 2011). フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica から電子テキストを入手することもできる。残念なことであるが、リプリント版及び Gallica の電子テキストには版画家たちの版画は収録されていない。
- (3) 間瀬玲子「ジェラルド・ド・ネルヴァルとセレスタン・ナントゥイユ」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』第22号（2011年8月）、pp.163-176。同論文の注(3)（172ページ）に記したように Henri Bérardi, *Les Graveurs du XIX^e siècle*, tome X, Paris, Librairie L. Conquet, 1890, pp.164-188 にセレスタン・ナントゥイユの項目が掲載されている。ベラルディはナントゥイユに25ページを割いている。
- (4) Philippe Burty, *L'Âge du romantisme, Camille Rogier, Vignettiste*, Paris, Ed. Monnier, 1887, p.10。『ロ

マンチスムの時代』*L'Âge du romantisme*は逐次刊行物 (livraison) であり、Camille Rogier はその中の1冊である。現物を入手し、詳細に検討を重ねた。裏表紙の記載によると、『ロマンチスムの時代』はフィリップ・ビュルティが芸術部分を担当し、モーリス・トゥルヌー Maurice Tourneux が文学部分を担当した。各分冊は12ページで、4フラン (当時) だった。ただし12ページには版画の部分は含まれていないので、実際のページ数は12ページよりも多い。フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica ではセレストアン・ナントウイユ、ジェラルド・ド・ネルヴァル、プロスペル・メリメがひとつのPDFファイルとなって公開されている。電子テキストは残念ながら白黒であり、ロジエのシダリーズのほのかな色合いを鑑賞することはできない。ロジエの部分の表紙に Don de M.Tourneux. — Exempl.complet (5 livraisons) avec les planches. 「トゥルヌー氏の寄付、版画付の完全版 (5分冊)」と手書きで書かれている。しかしその後にも文字が書かれているが文字が薄くて判読できない。incomplet (不完全) という文字だけが読み取れる。

なお引用文に登場するエチエンヌ・アラゴは4人兄弟のひとりである。一番上の兄フランソワ・アラゴ François Arago (1786-1853) は科学者で政治家であった。アラゴによる子午線の測量を記念し、パリを南北に貫く子午線上の地面に ARAGO と刻まれたメダイオンが地面に設置されている。そのうちの数個はパレ＝ロワイヤルにある。ネルヴァルの作品『塩密輸入人』及び『火の娘たち』に収録された「アンジェリック」第10の手紙にアラゴ氏が登場する。この2作品の該当する箇所はほとんど同じ文章である。Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1984, p.1351 (『塩密輸入人の注』) によると、ネルヴァル全集の編者はこの2作品のアラゴ氏はフランソワ・アラゴを表していると考えている。以下この巻をPL.Ⅱと略す。またネルヴァルは3番目の兄ジャック・アラゴ (作家で探検家) を「『パリの悪魔』 (1844年秋の始め)」*Le Diable à Paris*, [début d'octobre 1844]. という文章 (Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1989, p.856.以下この巻をPL.Ⅰと略す) において言及した。ネルヴァルがアラゴ兄弟と面識があったのかどうかはわからないが、名前を知っていたことは確かである。

- (5) Claude Pichois & Michel Brix, *Dictionnaire Nerval*, avec la collaboration de Jacques Bony et de Hisashi Mizuno, Tusson (Charente), Du Lérot, 2006, p.416及び『ネルヴァル全集 VI 夢と狂気』筑摩書房、2003年、p.618を参考にした。Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome III, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1993, p.1149も参考にした。以下ネルヴァルのこの巻をPL.Ⅲと略す。また *Dictionnaire des orientalistes de langue française*, Paris, IISMM et Karthala, 2008, pp.835-836.
- (6) PL.Ⅲ, p.401.翻訳をする際『ネルヴァル全集 I』筑摩書房、1975年に収録された中村真一郎・入沢康夫訳『ボヘミアの小さな城』及び『ネルヴァル全集 V 土地の精霊』筑摩書房、1997年に収録された田村毅訳『ボヘミアの小さな城 散文と詩』を参考にした。
- (7) PL.Ⅲ, pp.402-403.
- (8) PL.Ⅲ, p.1151.
- (9) プレイヤット版の編者はシダリーズの絵がロジエの恋人を描いていることは認めつつも、その源泉をクレピヨン・フィス Crébillon fils の『夜とひととき』*La Nuit et le moment*、ミュッセ Musset の『火のマロン』*Les Marrons du feu*、バルザックの『従妹ベット』*La cousine Bette* に求めている (PL.Ⅲ, p.1149)。ネルヴァルの研究者ジャン・セヌリエ Jean Senelier は1970年に発表した論文でシダリーズの特定を行った (PL.Ⅲ, p.1149, note 6)。しかしゴーチエ書簡集では人物特定を否定する意見を紹介している (Théophile Gautier, *Correspondance générale*, tome I, Genève-Paris, Droz, 1985, p.59)。

シダリーズの問題を再検討するためにドワイエネ時代以来のネルヴァルの友人アルセヌ・ウーセーの著書 Arsène Houssaye, *Les Confessions, Souvenirs d'un demi-siècle*, tome I, Genève, Slatkine Reprints, 1971 (Réimpression de l'édition de Paris, 1885-1891), pp.340-347をまず参照した。次にゴーチエ研究の古典的名著 René Jasinski, *Les années romantiques de Th.Gautier*, Paris, Librairie Vuibert, 1929, p.268 も

参照した。

- (10) Philippe Burty, *L'Âge du romantisme, Camille Rogier, Vignettiste* (p.8とp.9の間). Gallicaに収録されている電子テキストでは60/89にラ・シダリーズの絵がのっている。現物と電子テキストではラ・シダリーズの版画の収録ページが異なっている。版画は取り外しができるので、このようなことが起きたと考えられる。電子テキストの版画部分は小さくてかつ黒白で判別がつきにくい。版画を電子テキストだけで研究することは困難が伴う。ガリマール社の『アルバム・ジェラルド・ド・ネルヴァル』にはこの絵が収録されている。そこには《*La Cydalise. Dessin à la plume rehaussé d'aquarelle de Camille Rogier (Camille Rogier, vignettiste de Philippe Burty, Paris, Monnier, 1887).*》(『ラ・シダリーズ』カミーユ・ロジエの水彩ペンで書かれたデッサン『カミーユ・ロジエ、挿絵画家』フィリップ・ビュルティ、パリ、モニエ、1887) (*Album Gérard de Nerval*, Paris, Gallimard, 1993, pp.148-149.)と書かれている。掲載されている写真が非常に小さいので、詳しく検討することは難しい。
- (11) 間瀬玲子「ジェラルド・ド・ネルヴァルとセレストアン・ナントウイユ」(前掲論文)、pp.168-169に雑誌『演劇界』について多少論じた。この雑誌は週刊誌である。電子テキストでは、どこからどこまでが何月何日号なのかわかりにくい。1839年からは何月何日号かが明瞭に書かれている。念のために1835年第1巻、1835年第2巻、1836年第3巻を参照した。PL.III, p.1499によるとネルヴァルは『演劇界』1835年5月から1836年5月まで編集に関わっていた。
- (12) *Le Monde dramatique, revue des spectacles anciens et modernes*, tome premier 1835. フランス国立図書館電子テキストサイトGallica で公開している電子テキストでは530ページである。この巻をMDIと略す。MDIの 39/530にある。
表紙近くの目次はMDI 9/530 に掲載されている。なお *La Traite des Noirs* の上演日が1835年4月24日であることを *Almanach des spectacles de 1835 et rappel de 1834*, Paris, Barba, 1835, p.168 で確認することができた。シルク・オリンピック座は4フランから60サンチーム(1835年当時)までの7段階に観劇料金が分かれていた。各席の構造も書かれているので、劇場全体を想像することができる。パリの他の劇場に比べて高い値段の劇場ではなかった(pp.32-33)。また同書には劇場の経営陣の名前も明記されている。また芸術部門関係者、曲馬師、オーケストラ指揮者等の名前もわかるので非常に便利である(pp.67-69)。
- (13) MDIの 38/530にある。
- (14) Charles Desnoyer et Jules-Édouard Alboize du Pujol, *La Traite des noirs*, drame en cinq actes suivi de documents inédits, présentation de Barbara T. Cooper, Paris, L'Harmattan, 2008. p.XXX.本書はクーパー氏による序文、参考文献、本文、多数の劇評によって構成されている。本論文の注(12)で紹介した *Le Monde dramatique* の記事も掲載している(pp.185-186)。またクーパー氏は Michel Brix, *Nerval Journaliste* (1826-1851), Namur, Presse Universitaires de Namur, 1987 (deuxième tirage revu), p.95の記述を紹介している。ブリックス氏は問題となっている無署名記事を本文ではなく、注で言及するに留め、ネルヴァルが書いたかどうかは断言していない。またクーパー氏が紹介している Jacques Bony, 《*Nerval et les aspects matériels du spectacle*》, *Romantisme*, N°38 (1982), pp.127-139 においてネルヴァルがシルク・オリンピック座の有名な舞台装置に重きを置かなかったことが指摘されている。
- (15) PL.I, pp.630-633.
- (16) PL.I, pp.1115-1120 et pp.1885-1886.『ネルヴァル全集 IV 幻視と綺想』筑摩書房、1999年に収録された藤田衆訳『モンテネグロの人々』の訳文と注を参考にした。
- (17) MDIの 65/530. A.K はネルヴァルの友人で作家アルフォンス・カー Alphonse Karr であると考えられる。彼は『演劇界』同号には署名入りの記事も書いている。*Almanach des spectacles de 1835 et rappelle de 1834* (前掲書) p.159によると《*Une chaumière et son cœur*》(ヴォードヴィル、3幕)は1835年5月12日にジムナーズ・ドラマチック座で上演された。そしてウジェニー・ソヴァージュ嬢のデビュー作であ

ることも明記されている。ヴォードヴィル (vaudeville) は通俗喜劇を意味している

- (18) MDIの 64/530.
- (19) PL. II ,p.867. なおPL. II , pp.1690-1691の注に画文集『トルコ』の諸事情が詳しく書かれている。
- (20) Camille Rogier, *La Turquie, Mœurs et usages des orientaux au dix-neuvième siècle*, avec une introduction par Théophile Gautier, Paris, l'auteur, 1846.
- (21) 間瀬玲子「ジェラルール・ド・ネルヴァルとセレストアン・ナントゥイユ」(前掲論文)、p.169。
- (22) Bürger, *Lénore*, traduction de Gérard, mis en musique par Hippolyte Monpou, [Paris], Romagnesi,1833.
- (23) *Album Gérard de Nerval*, p.54.
- (24) Philippe Burty, *L'Âge du romantisme, Gérard de Nerval*, Paris, Monnier, 1887. 現物は入手困難であり、電子テキストを参照した。注(4)と(10)で紹介したGallica で公開している電子テキストの47/89。なお *Album Gérard de Nerval* (前掲書),p.135に上記のビュルティの本に掲載されたイルディス=ハンの宿の絵が掲載されている。絵は小さいが印刷がとて鮮明である。
- (25) PL.I,p.1404. 手紙文を訳す際に『ネルヴァル全集 IV 幻視と綺想』(前掲書)に収録された「書簡 1843年7月～1850年7月」を参考にした。
- (26) PL.II,p.637.『東方紀行』を訳す際に『ネルヴァル全集 III 東方の幻』筑摩書房、1998年に収録された野崎敏・橋本綱訳『東方紀行』を参考にした。
- (27) *Album Gérard de Nerval* (前掲書),p.134 にロジエがアトリエで2人の男性及び3人の女性と一緒に写っている写真が掲載されている。269ページの注では「ネルヴァルがロジエとコンスタンチノーブルで会った時よりも後」の写真であると書かれている。オルセー美術館のHPを検索するとアンリ・ソヴェール Henry Sauvaire (1831～1896) がロジエを撮った写真が多数保存されていることがわかった。ソヴェールは外交官で、写真家であった。彼の人生はかなり詳しく研究されている。HPの説明によるとソヴェールの孫たちのコレクションが1995年に国家に寄贈され、オルセー美術館で保管されている。幸いなことにこのコレクションの写真の中に *Album Gérard de Nerval* に掲載されている写真と同じものがあつた。その説明によると、1860年から1866年に撮影されたもので、場所はバイルートと書かれている。

付記：本論文は平成23年度科学研究費補助金基盤研究(C)「ネルヴァルにおける視覚芸術と文学作品の関係」(課題番号 21520359) の研究成果の一部を公表したものである。

(ませ れいこ：英語メディア学科 教授)

